

文字・表記 (理論・現代)

武部良明

一、考察の範囲

文字と表記に関する研究のうち、理論・現代が私の担当である。この場合、文字については、現代日本語を書き表すための漢字・平仮名・片仮名・ローマ字・数字・符号・記号すべてが含まれる。表記については、これらの文字を用いての現代日本語の書き表し方としてとらえることにする。こうして一応の範囲を限定し、59年・60年の間に注意を向けて過ごしたが、容易なことではなかった。単行本については何とかなったが、紀要類は早大日文研究室の上野助手の協力を得てとらえ、最終的には国研文献調査室のカードで補同図書館で目を通した。以下、こうして集めた単行本四十冊、論文百五十編をもとに、私なりに取捨分類して取り上げることにする。

二、基本的な研究

他の分野に比し、文字・表記の研究は後れているが、一つには文字を付随的なものとする西洋言語学の文字論から脱し切れないところに問題がある。その点では、池上禎造が『漢語研究の構想』(岩波書店、昭59・7)をまとめた意義が大きい。巻頭「漢語研究の課題」

は、漢字を漢語としてとらえたこと、和製漢語も含めたことが研究の指針となる。造語については「近代日本語と漢語語彙」「漢語の造語力の現状」があるが、この面では鈴木修次「漢字は日本語のお荷物か」(学灯社「国文学」、昭59・5)が翻訳語としての新漢語を重視した点にも注目したい。

表記一般については、金子尚一「現代日本語の表記」(至文堂「国文学」昭60・3)が一通りの問題点を指摘している。漢字については、海保博之その他による「漢字の機能度指数開発の試み」(「計量国語学」15-1、昭60・6)と吉村弓子「漢字基底語の現代における位置」(筑波大・「日本語と日本文学」5、昭60・11)があるが、吉村には別に「語表記意識の変異」(筑波大「言語学論集」4、昭60・5)もある。仮名については、柏木成章「現代日本語における片仮名の役割についての一解釈——特に平仮名との対比において」(「大東文化大紀要・人文科学」22、昭59・3)が、片仮名使用の史的背景と個性的な文字体系を重視している。

字体については、いろいろと取り上げられている。「日本語学」(昭59・3)が字体を特集した際の巻頭、林大「字体・字形・書体をめぐって」は、従来の字体・書体の他に書態・書風を認めようとしたこ

と、個々の漢字の字体を単体・複体に分け、部分としての字体素を取り上げたことなど、一つの指針となる。同特集では杉本つとむ「異体字はなぜうまれるか」、野村雅昭「同字と別字のあいだ」が、字体考察の基本的な考え方を展開している。杉本は、異体字の生まれる契機として「略画・増画・代行・置換・草体楷化・兼用混用・音符交換・部分交換」を論じ、野村は漢字の形・音・義のうち、音と義との結合が形と他の要素との結合よりも大きいとしている。

書体については、同じ特集の中に藤原宏「教育用漢字の標準字体」があり、明朝体活字による常用漢字表の漢字と、教科書体活字による学年別漢字配当表の漢字とは、字体として同じだとしている。この点に関しては、安藤隆弘「教科書体活字」(月刊国語教育) 昭60・10)と柘植昌汎「漢字の字形—筆写文字と印刷文字の違い」(山梨大國文学研究室「国文学論集」22, 昭59・3)も参考になる。なお、水上静夫「書体・草書」(群馬大教育学部紀要人文社会学編) 34, 昭60・3)も説得力を持つ。草書は楷書・行書からの派生ではなく、篆書・隸書を簡略に書いたことに由来するという論を、各時代の実例で裏付けたものである。

仮名については、富田富貴雄「小学校国語科の教科書に見られる片仮名の字体」(岡山大教育学部研究集録) 68, 昭59・7)、吉見孝夫「文字史からみた現行仮名字体制定の背景—片仮名の場合」(北海道教育大紀要人文科学編) 351, 昭59・9)が参考になる。なお、宮沢正明「筆写文字の実態とその変容」(都留文科大國語国文学会「国文学論考」20、昭59・3)は、平仮名の丸みを帯びてころころしている活筆文字の実情と原因を考察したものである。

三、現状の分析

文字・表記の現状を分析したものとしては、まず天沼寧「十分・充分・じゅうぶん」(大妻国文) 15, 昭59・3)、くりかえし符号」(大妻女子大文学部紀要) 16, 昭59・3)、「ケ」の字について」(同17, 昭60・3)がある。天沼の論は、辞書の扱いや実際の用例を取り上げ、その要因を考察したところに特色を持つ。これに類するものに、文化庁「言葉に関する問答集」があり、第10集(昭59・3)と第11集(昭60・3)が刊行されている。

漢字の読み方を取り上げたものとしては、橋本研二「ベンとピン、字音語素「便」のヨミと意味」(跡見学園女子大國文学科報) 12, 昭59・3)と瀬戸宏「四の読音について」(早稲田大語研「LITNEWS」77) 昭60・3)がある。橋本は、「学生便覧」につき、ベンとピンで意味の異なることを論じてベンランと読むべきだとしている。瀬戸は、「四」のシ・ヨン・ヨ・ヨツ・ヨツ五通りの読み方につき、その実情を分析している。漢字を組み合わせた漢語については、日向敏彦「漢語サ変動詞の構造」(上智大「国文学論集」18, 昭60・1)があり、漢語の構成要素については、水野義道「漢語の接尾的要素「一中」について」(日本語学, 昭59・8)と、奥野浩子「否定接頭辞「無・非」の用法についての一考察」(言語学, 昭60・6)がある。

表記の実情考察としては、中西靖忠「国語表記の現状—ルビの問題を中心に」(高松短大研究紀要) 14, 昭59・3)が意味を限定するルビの役割を扱い、上田朝一「現代新聞の用字—とくに人名表記」(フェリス女学院大紀要) 20, 昭60・3)が新聞によって異なる人名の字体を取り上げている。この点では、林大「現代漢字の字体はこれでいいか」

〔学灯社「国文学」昭59・5〕が表外漢字の字体を論じていて参考になる。

作家の用字については、新裕美「三島由紀夫の漢語における語構成」〔岡大國文論稿〕13、昭60・3〕が「金閣寺」と「天人五衰」から全漢語を抽出し、文体は変わっても語彙は変わらないとしている。この点では、芳賀純「大学生による要約文と漢字使用率」〔計量国語学〕14-7、昭59・12〕も興味深い。このほうは要約文の字数を切り詰めていくと漢字使用率が高くなることを論じたものである。なお、遠藤織枝「私の年賀状像」〔言語生活〕昭60・1〕は年賀状の分析であり、中野洋「看板の文字調査」〔計量国語学〕15-2、昭60・9〕は看板の文字が子供の漢字学習に与える影響を実証している。

科研究費研究としては「情報化社会における言語の標準化」の中の「日本語の正書法及び造語法とそのあり方」(研究代表者:林大)があり、特に学術用語については、森岡グループの「明治期専門術語の語構成」と藤原グループの「学術用語の標準化」に注目したい。前者は「医語類聚」以下六編を「明治期専門術語集」(有精堂、昭60・9)として刊行し、後者は「文部省学術用語総合リスト」をまとめた。なお、野村グループの報告書「現代学術用語の造語法に関する資料と問題点」は、造語過程のモデル化と造語パターンをまとめたものである。

四、教育の立場から

漢字教育の面では、小林一仁「漢字の系統的指導」(明治図書、昭59・4)がある。小林の前著「漢字教育の基礎研究」の姉妹編で、形・音・義の三面から共通点・相違点を確認して進む方法が具体的に詳述さ

れている。付録の漢字指導基本表も、常用漢字についての実践上の留意点をまとめたものとして参考になる。小林には、この期に「漢字の系統的指導法における諸問題」〔国語科教育31〕、昭59・3〕、「漢字の読み書き」〔国語教育〕昭59・5〕、「高等学校での漢字指導の工夫」〔国語教室〕21、昭59・9〕、「教育漢字を見直す」〔応用言語学講座〕第一巻・「日本語の教育」・明治書院、昭60・3〕がある。

学年別配当の面では、興水実「基準性と漢字の学年配当」〔国語教育〕、昭59・8〕と「漢字の学年配当」〔国語教育〕昭60・2〕がある。科研究費特定研究としては、国研言語計量研究部の「常用漢字の学習段階配当のための基礎研究」が、教科書の用語用字調査(資料集として、「小学校教科書における学習漢字の使用度数表」と「中学校理科および社会科教科書における漢字の使用度数表」をまとめている。

具体的な指導法については、本堂寛「文字の読み書き指導」〔国語科教育〕昭59・8〕、謡口明「漢字漢語に留意した国語指導」〔国語教室〕昭59・9〕、竹之内裕章「漢字学習指導の実践的研究(2)・統一的指導の具現化のために、低学年を中心に」〔佐賀大教育学部研究論文集〕32・2、昭60・2〕などがある。テストの面では、郷衛その他「漢字テストについて」〔跡見学園国語科紀要〕33、昭60・4〕が九年間の中高漢字テストの成績を分析している。書けない漢字が、画数の多いものではなく、日常生活から遠いもの、使用頻度の少ないものだという結論も興味深い。大きな特集としては「実践国語研究」昭59・1と「月刊国語教室」昭60・4〕がある。

なお、日本語教育のほうでは、サミエル・マリーティン「学習者を因らせる日本語表記の諸問題」(大阪大日本字報)4、昭60・3〕が具体例を示しながら問題点をまとめている。漢字の読み方については、

藤井美智子「漢字の読みをどうするか」(『国際字友会日本語学校紀要』8・9、昭59・3、昭60・3)が四角號碼の導入を取り上げている。非漢字系学習者に対しては武部良明「漢字の単位について」(『講座日本語教育』20、昭59・7)と「入門課程の漢字指導」(同21、昭60・7)がある。漢字系学習者に対しては、李漢燮「日韓同形の漢字表記語彙」(『日本語』昭59・8)が肯定的な立場で取り上げている。科研費研究としては、「中国人の日本語学習における言語干渉の実態調査と分析」(研究代表者・中川正之)が、日本語における漢字の読みについて具体例を重点的にまとめている。これらは、国語教育の面でもいろいろと参考になるはずである。

五、国語政策との関連

国語政策の面では、国語審議会「現代仮名遣い委員会試案」(昭59・2)に関連して取り上げたものが多い。その点では「日本語」昭59・5が現代仮名遣いを特集したことも注目される。この中で永野賢「現代かなづかいの問題点」は、由来・内容・社会的存在理由を論じている。今坂晃「国語審議会と現代かなづかい」は仮名遣い委員会の基本的な考え方と委員の意見の概要をまとめ、岩淵匡「しぢ」・「ず」・「づ」についてと奥村三雄「連濁」は、問題点の考察に役立つ資料という点に意義がある。こまつひでお「定家仮名遣の軌跡」、武部良明「歴史のかなづかいとは」、沼本克明「字音仮名遣いとは」、石野博史「カタカナ語のかなづかい」などは、いずれも関連分野を取り上げたものである。

このような取り上げ方に対し、「現代仮名遣い——新聞協会が国語審議会に意見書」(『新聞研究』昭60・7)は、新聞協会としての意見をまとめ

たものである。また、西原忠毅「ぢじづ考」(『音声学会会報』178、昭60・4)は、発音で区別する人の側に立って地方文化の権威を守ってほしいとしている。当然のことながら、主義主張を貫く論も盛んで、カナモジカイの「カナノヒカリ」は二回(昭60・6、昭60・12)にわたって特集している。特集外ではキヨハラクニタケ「改定現代仮名遣い(案)・ここがいけない・こうすればよくなる」(昭60・10)が「ワカチガキもかなづかいのうち」とする論は新しい問題提起である。国語問題協議会の「国語国字」の中では、木内信胤「国語問題協議会試案」(昭59・6)が四つ仮名を旧来の慣行どおりとし、八行活用語尾を復活しようとする提案であり、萩野貞樹「現代仮名遣問題の一の見方」(昭60・11)は、現代仮名遣いが「書き改める場合の準則」ではない点から、文学作品の現代表記化は「贗物」だと指摘している。なお、林大「改定現代仮名遣いの案について」(『言語生活』昭60・4)は穏健な紹介であり、白石大二「新しい国語政策」(『言語生活』臨時増刊号、昭60・4)は、現代表記の出版時点(昭和20年代)をまとめたものである。

一方、中国の文字改革の面では、周有光の名著「漢字改革概論」が橋田田国訳で刊行(日本のローマ字社、昭60・2)されたことも意義深い。原著は北京大学での講義の原稿で、内容は漢字改革運動の歴史の展開と、漢語ローマ字化・漢字簡体化を扱っている。現代中国の文字改革を理解する上で欠かせない本書が日本語で読めるようになったことは、大いに歓迎すべきである。

なお、「中国語研究学双書」の第四巻として、芝田稔・鳥井克之「新しい中国語・古い中国語」(光生館、昭60・9)が刊行された。これも中国語の表音化と漢字簡体化の歴史を具体的に取り上げている

点で併せ参考になる。また、日中漢字字体の統一問題については、林大「日中民間人会議と漢字問題」(『言語生活』昭59・12)が問題点を要領よくまとめている。この点で松岡栄志「中国の漢字と日本の漢字は調整をはかれるか」(学灯社『国文学』昭59・5)は否定的であり、菱沼透「中国の標準字体と日本の通用字体」(『日本語学』昭59・3)も、同字体でありながら意味用法の異なる点につき、「生」を例として論じている。

六、他分野からの研究

文字・表記については、全く別の分野での研究が割り込んできたのも新たな特色である。この点では『漢字を科学する』(有斐閣選書、昭59・11)と『文字の科学』(法政大学出版社、昭60・3)が見逃せない。前者には、野村雅昭・山田純・石田敏子諸氏の論文とともに、海保博之(心理学)「人間は漢字をどう処理しているか」、黒須正明(工学)「コンピュータにとって漢字とは」、山島重(神経学)「脳損傷者にとって漢字とは」、佐々木正人(福祉学)「盲人にとって漢字とは」などがある。後者は六編すべてが他分野で、桑山弥三郎(デザイン)「形象化によるデザイン書体の原点と原理」、倉内秀文(科学捜査)「筆跡監定と筆順・筆圧について」、矢島敬二(物理学)「アラビア文字の形体と印字」、吉村ミツ(工学)「手書き文字の個人特性」、山田博三(工学)「機械による手書き文字の認識」、大沢一爽(生理学)「脳波トポグラフィと五指筆圧記録の相関」などから成る。

特に生理学の面では、『言語生活』(昭60・7)が「文字の科学」を特集した中の東条吉邦「文字と脳の科学」が、問題点を説明している上で参考になる。『日本語学』に連載された「神経言語学」では龜

井尚「漢字と仮名」(昭59・2)が、脳の両半球分担との関連で、漢字の右半球優位、仮名の左半球優位を説いている。工学の面では光学式文字認識装置(OCR)の面で、白井克彦・影沢正「平仮名文字パターンにおけるストローク情報の抽出」(『早稲田大情報科学研究教育センター紀要』1、昭60・4)がある。山本和男「手書きOCR用文字の形」(『日本語学』昭59・3)は、機械にも読み易い文字を自然に書くことが特技になると指摘している。心理学の面では、大西文行「漢字の心理学的研究・同音語の再生について」(『新潟大教育学部紀要』25・2、昭59・3)が、同音漢字再生の経過を分析していて興味深い。

なお、文字の機械化という点では、ワープロの関係も見逃せない。この点では『日本語学』(昭59・7)が「ワードプロセッサ」を特集した中の山田尚勇「ワープロと日本語の現状と将来」が、ローマ字国におけるタイプライター並みの普及を考え、問題点を取り上げている。石綿敏雄・吉田将・佐竹秀雄・山本直三諸氏の啓蒙的な論文その他も、ワープロ礼賛の方向でまとまっている。

その点では、ワープロが国語教育・日本語教育の面から積極的に取り上げられても不思議ではない。中には、藤崎博也「ワードプロセッサは日本語に異変をもたらすか」(学灯社『国文学』昭59・5)のように、漢字能力の低下を憂える論もある。しかし、野村雅昭「エレクトロニクス時代の漢字国語教育」(『国語教室』昭59・9)、森川知史「日本語ワープロ教育の課題」(『佐賀寛谷短大紀要』30、昭59・2)などは、国語教育面での積極的な活用を取り上げている。『日本語教育』54(昭59・10)が「コンピュータと日本語教育」を特集した中では、原土洋「日本語ワードプロセッサの日本語教育への利用」

書くことの反省と訓練」、山本直三「日本語ワードプロセッサと言語教育」などが参考になる。

七、関連する事典類

最後に関連の事典類について触れておく。この面ですり取り上げなければならぬのが樺島忠夫その他「事典・日本の文字」(大修館昭60・4)である。文字・表記とその関連分野を十の章と付録に分け、十四氏が分担執筆したもの。万葉仮名からワープロ用のドット文字までを網羅した初めての文字百科事典である。

個々の面では、白川静「字統」(平凡社、昭59・8)と佐藤喜代治「字義字訓辞典」(角川書店、昭60・1)がある。前者は漢字の字体学的研究で、六八〇〇の漢字につきその成り立ちを系統立てて解説したところに特色がある。後者は、従来とかく同一視されてきた漢字の字義と、それに当てられた字訓としての日本語の語義との関係を考証したものの。取り上げた漢字は常用漢字と人名用漢字にとどまったが、漢和辞典と国語辞典との谷間を埋める形になっている。総論としての「漢字と日本語」にも注目すべき論がある。

人名の漢字については「日本姓氏大辞典」三巻(角川書店、昭60・3)がある。取り上げた人名十三万、日本ユニバック社の姓氏ファイルを基礎に丹羽基二の個人収集を加えたもの。三巻の内容は、読みで五十音順にした発音編、漢字で画数順にした表記編、丹羽の論考としての解説編から成る。論考は姓氏の由来を取り上げ、地名型・氏型など三十三に分類した成果が各編の姓氏にも及んでいる。

なお、文字・表記とは少し離れるが、桑山弥三郎「世界の絵文字」(柏書房、昭59・11)・江川清「記号の事典」(三省堂、昭60・12)・日本

規格協会「JIS記号・略号大辞典」(同協会、昭60・10)も見逃せない。それに特殊分野のものとして、鈴木力二「図説・盲教育史事典」(日本図書センター、昭60・6)がある。

八、余 論

以上、この二年間の文字・表記に関する研究を概観してきたが、特記事項としてはワープロがある。顧みれば、昭和五十四年、東芝が初めて日本語文書処理機として公開したとき、一台六三〇万円は高根の花であった。それがこの二年間、個人用の十万円を割る機種まで出て、急速に普及した。国字問題の前提として障害視されてきた漢字が、その評価を改めたことにもなる。今後はその点からの漢字仮名交じり文の見直しも重要な課題に違いない。それに加えて、他分野での文字・表記の研究成果も見逃せない。それらが文字教育の面にも影響してくる。国語学者も、文字・表記の面では、従来の殻を抜け出さなければいけない時期に来ているわけである。

——元早稲田大学教授——